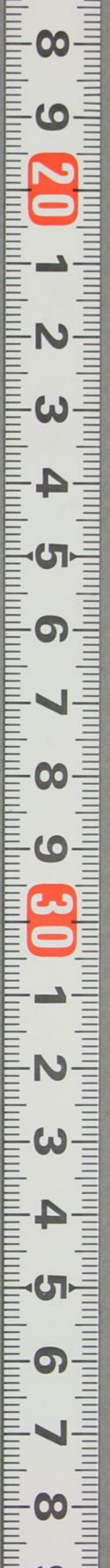
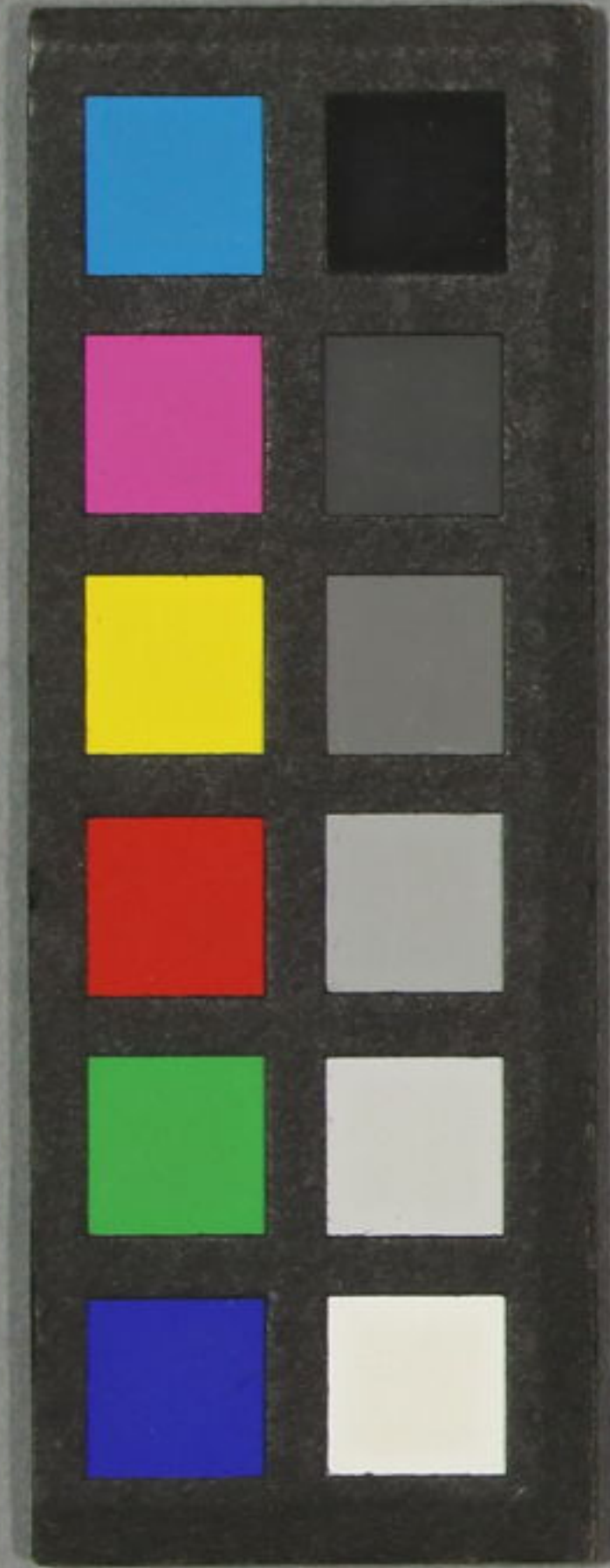


正史  
實傳

以呂波文庫

六

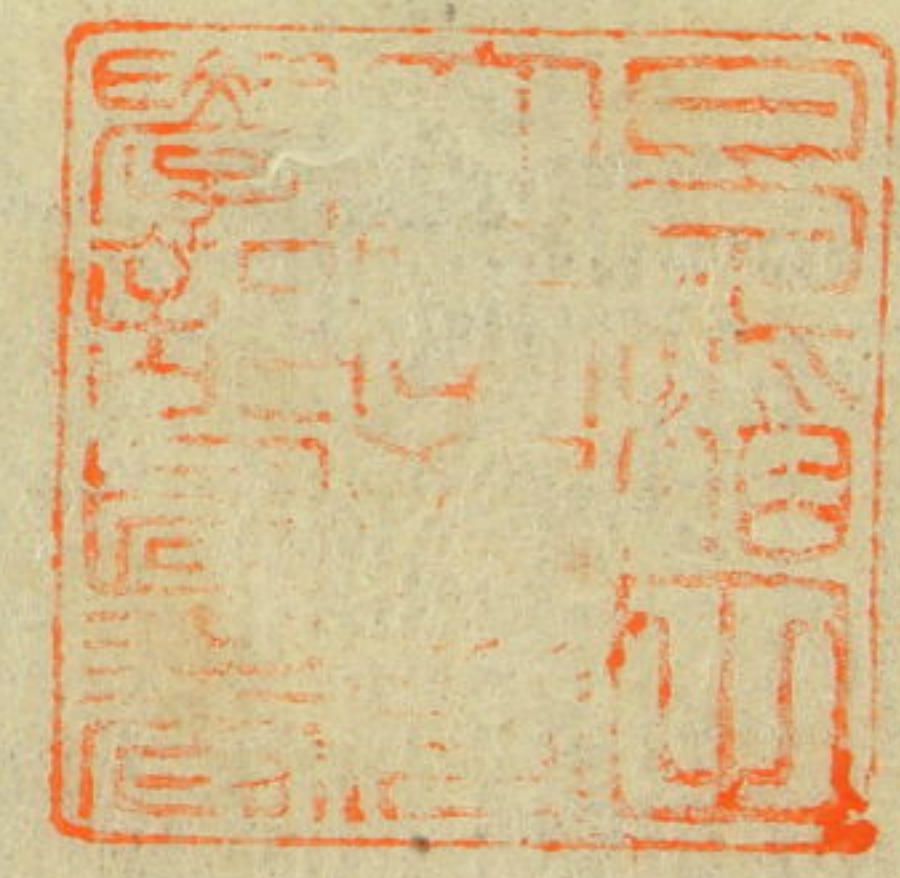
^13  
4307  
6



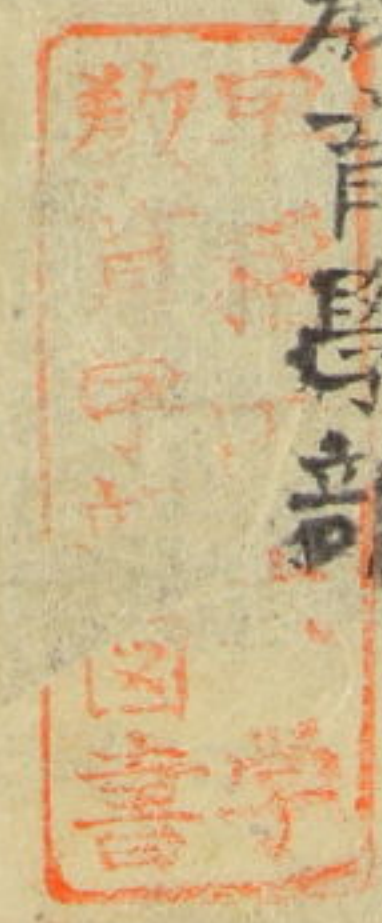


ハ13  
4307  
6

2  
250  
6



早稲田大學教育學部



16094

<2000-342>

いはは文庫の編序

佳書ありとも食せざるの發文を陳林

難あて大いなるいふ味く穿て故人の考言

并に彼等後を文庫に中た侍る事傳あり

せど素より果敢なき第一におおまの那柳橋の

悪い講釈はつるを中たつるいふ合言と吐く



ことばの織も免れぬとて我々の人書ふ  
 後々後々其書に於て儼然と坐す  
 夜々輝々燈火の光も延任事の手紙  
 脚車老樹の影を光る焦燥の心も急  
 げぐまらぬは相子津田の長橋あがく  
 志くとも婦幼程書を勸懲の標の

いふは十六日一

為の捷徑も徹まうしむかきまふ手  
 を屏げたる編敷も実少子の心も可角  
 遠く作者の筆を以て見よふは海免  
 舟へかきまふ

四十七士の名も高橋の如輝く書者の目  
 六海氷春水記あり





光風が支へ  
 身上編  
 伊津  
 女が筆  
 跡よ  
 あ  
 りたう  
 因て遠く畧す

矢間  
 新六光風

光棍  
 強八



阿民の里見性の悪女  
 節婦  
 於民  
 光棍強八の苦  
 念をも父の遺訓を  
 變せし湖平太正知小  
 身をもて二子を得ら正知  
 義小よつて死せとき良夫の  
 義名世に埋れん支を歎き由を  
 公に訴へくおの道ふと迫り一死  
 官吏より止められ警を藉て節を  
 全ふ其子兼松森氏を起して  
 某候よ奉仕せ  
 支の本文小変

湖平太  
 一子兼松

いろは十六日三





不具野の  
蝶菴

中村  
軍兵衛



片岡が誠忠  
神小  
通ト  
青山  
相持  
の冥  
助よりて  
眼病忽地不  
平愈るも庸医  
嫌養貪慾の  
財衣失ふらど神策  
尤も  
尤も

片岡が下僕  
元助

片岡が  
下僕  
元助











播州 赤保 塩濱の 遠景



正史 實傳 いろはは文庫卷之十六

江戸 爲永春水著



第三十一回

再説師直ハ思ひかけりて其法ハ出合給ふに周章身を  
 極り掛ひ運きんとまらふ所流し侍女二人ガ左右より  
 押くるを極剛み組まゆ彼曲者ハ其法をまらば及ぶの  
 侍ハ氷の如き刀を拵て師直の綱ハ突つけ押へて女の掌  
 中を除るいとぬもひらぎまらば其終ハ師直の首をとりぬ



樹を刳除くをせざるゆゑ二人の女ハ一生幾命の力を  
先の内息をあら 女ハと 老ても還らぬ内息常にお首を  
延て内息をせざるをこそまを 女ハサアは終にお首を早く私の  
手でもは侵せざる通しに能ひハナア 師直 主殿の女  
ども出合くトのふ妻も立と存ドもぞ字ふ大妻忍びの者ハ  
是涙のおよむに女の内息ありとも師直と首をささる  
塩谷の浪人推来し主君の敵と付すに覺然な  
さ直ヨ 野氏ト言ひの 忽ち首をき切り 婦子の首を

吹さら其まこのや本流のふささるる 頸れせらるる  
凍るふうなづき 喉きて 師直の首を飯抄の色と庭の  
雪間へあける 狼煙 責るけと申天へ月をたふして  
登れば 雲々の合處より西南の風をうてお出を寄せ太鼓  
響の敷風ふささるるを聴ゆるちう忍びの者ハいとまをく  
伊達の西の用公堀あけ七よする 刳捨を問より 外へけ  
渡し 冬々山所より来るおれハ二人の女を介抱し 固く懐  
ひお中よりハ古岡平をのまるとのみ



如初る時、世書傳へ、越と八たるふ相違の  
ゆゑ、七まゝに扁屈者の批判もあらん、撰者  
元来その辨あり、或ハ本傳滿尾の節、或ハ  
物論ふ記、まのり

以時師直と押へて其身の矛盾を清く、骨をばせ、  
則ち立林、其の妻ありて、義士と内通し、今宵の  
仕義ふむ、びらうを、まより、後小尼とありて、澄島、町、  
住居、甥の法師、賢了と、便りあり、うゝ世と、と、四十

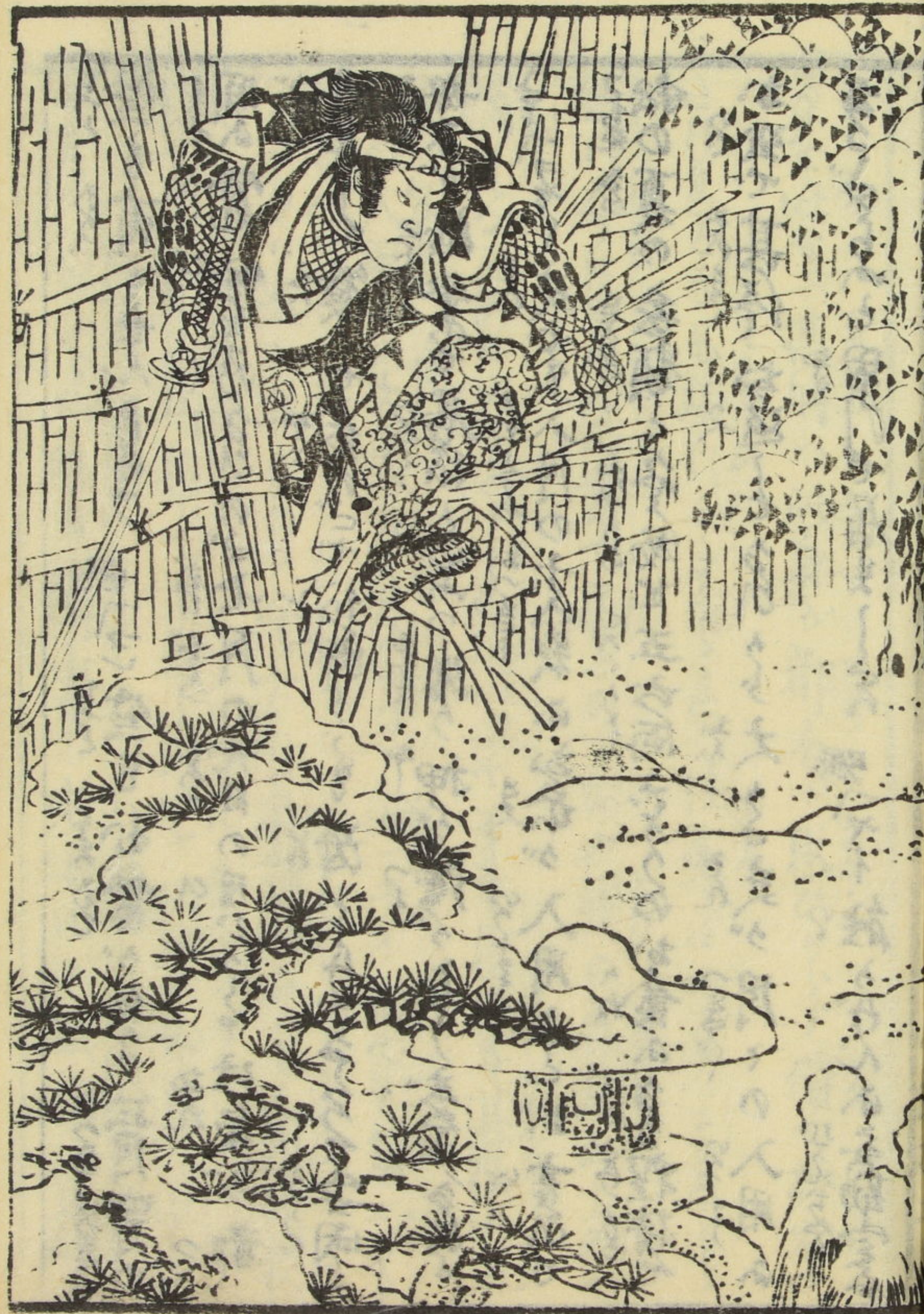
余人の遺善と、専一と、公けり、と、ま、橋の尼の外、  
五人程の女と、高野の奥へ、入置し、り、と、唯七の妻  
ありとも、師直と、う、せ、女、の、傍、り、次、の、巻、の、あ、り、出  
せ、且、七、の、甥、賢了、も、表、討、の、時、小、僧、と、小、僧、あり  
こ、道、も、又、後、の、巻、の、著、を、一、  
室、の、一、奇、の、の、外、傳、の、り、を、も、く、塩、谷、家、滅、亡、の、際、小  
臨、んで、其、家、中、疑、義、あり、と、ざる、者、と、一、人、も、あ、ら、ざる  
中、の、一、も、別、に、長、生、の、悲、し、の、疑、儀、と、せ、し、の、あ、り、と



小野の鎌倉の南の通り酒門町とりの町の東家の  
住人女あり歳ハ廿支を二回越すも寫田の債ノ備  
形空の美樂けはまらぬ北支とありける  
見ゆども今年五束の小思もあらそお又苦勞の  
目を送るべ自然と公の志し入るを只そのよのこ  
大切のいり育ら不自由もまらぬ身の食客の人  
等一は昨日今日伯父とありともその實ハ他人の  
けの患者の強ハといふ同居と此程のいふ母子の

者を養ふのて困ふくけ 強ハコウお民廿の方そ  
と氣の重きを極む極まるを酌みし 便つと用さ  
居るが今日を昨日と思入る十二月の十四日  
大晦日が一暮るが 餘米のびてもるけり  
後もの交とも何ぞかのとがるの此身ア明日の先頃  
借入の貴の残と貸を眞の植料と二々四百をうけり  
のひせとの残かお米まら賃の重類でも後して  
後の持てれて残めしと云々 一早おの方のまら類ハ







世も有ませんものヲ 強<sup>ハ</sup>コ<sup>ト</sup>は<sup>シ</sup>公<sup>ノ</sup>管<sup>ヲ</sup>が<sup>ら</sup>う<sup>ハ</sup>二月<sup>ノ</sup>四月<sup>ノ</sup>  
同<sup>ノ</sup>覚<sup>悟</sup>を<sup>あ</sup>ら<sup>ま</sup>ひ<sup>の</sup>ご<sup>と</sup>七月<sup>ノ</sup>廿<sup>日</sup>の<sup>月</sup>ら<sup>う</sup>は<sup>身</sup>が<sup>都</sup>  
舎<sup>を</sup>と<sup>て</sup>食<sup>と</sup>と<sup>の</sup>ご<sup>と</sup>何<sup>所</sup>ら<sup>う</sup>も<sup>は</sup>け<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>安<sup>國</sup>  
母<sup>が</sup>活<sup>業</sup>を<sup>居</sup>宿<sup>と</sup>の<sup>い</sup>勝<sup>り</sup>押<sup>が</sup>強<sup>う</sup>ら<sup>う</sup>ま<sup>ち</sup>多<sup>ひ</sup>  
一<sup>月</sup>も<sup>ま</sup>じ<sup>ま</sup>ず<sup>も</sup>八月<sup>ノ</sup>の<sup>十</sup>八<sup>日</sup>の<sup>夜</sup>め<sup>お</sup>祭<sup>が</sup>入<sup>用</sup>と<sup>こ</sup>お<sup>言</sup>ひ<sup>で</sup>  
秋<sup>ノ</sup>夏<sup>ノ</sup>の<sup>衣</sup>類<sup>と</sup>冬<sup>ノ</sup>物<sup>と</sup>五<sup>六</sup>両<sup>を</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>お</sup>食<sup>の</sup>多<sup>る</sup>程<sup>持</sup>  
お<sup>出</sup>で<sup>其</sup>修<sup>お</sup>返<sup>し</sup>て<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>大<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>が<sup>月</sup>の<sup>入</sup>用<sup>の</sup>  
ま<sup>じ</sup>ま<sup>ず</sup>と<sup>思</sup>ひ<sup>居</sup>ま<sup>し</sup>う<sup>と</sup>強<sup>ハ</sup>ヤ<sup>イ</sup>性<sup>が</sup>び<sup>ん</sup>め<sup>勤</sup>意<sup>を</sup>

る<sup>を</sup>は<sup>せ</sup>其<sup>時</sup>の<sup>此</sup>身<sup>が</sup>都<sup>令</sup>が<sup>悪</sup>ひ<sup>う</sup>ら<sup>ナ</sup>借<sup>を</sup>持<sup>出</sup>  
し<sup>け</sup>連<sup>ども</sup>も<sup>も</sup>疎<sup>引</sup>ら<sup>う</sup>と<sup>ま</sup>じ<sup>ま</sup>ず<sup>は</sup>兼<sup>の</sup>ご<sup>と</sup>そ<sup>の</sup>ご<sup>と</sup>  
後<sup>の</sup>今<sup>日</sup>も<sup>も</sup>活<sup>業</sup>を<sup>居</sup>宿<sup>の</sup>が<sup>ら</sup>の<sup>時</sup>の<sup>衣</sup>類<sup>を</sup>ら<sup>う</sup>  
満<sup>ち</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>の</sup>と<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>一<sup>月</sup>も<sup>ま</sup>じ<sup>ま</sup>ず<sup>も</sup>其<sup>後</sup>め<sup>も</sup>  
月<sup>ノ</sup>入<sup>用</sup>が<sup>多</sup>う<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ひ</sup>が<sup>多</sup>く<sup>強</sup>ハ<sup>ソ</sup>イ<sup>何</sup>でも<sup>角</sup>でも  
る<sup>ご</sup>ら<sup>う</sup>が<sup>益</sup>め<sup>多</sup>い<sup>の</sup>と<sup>ま</sup>じ<sup>ま</sup>ず<sup>も</sup>衣<sup>類</sup>が<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>と<sup>兼</sup>が<sup>衣</sup>  
兼<sup>でも</sup>お<sup>せ</sup>足<sup>錢</sup>寄<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>一<sup>月</sup>も<sup>ま</sup>じ<sup>ま</sup>ず<sup>も</sup>五<sup>メ</sup>ヤ<sup>三</sup>メ<sup>ハ</sup>出<sup>来</sup>ら<sup>う</sup>  
そ<sup>ま</sup>じ<sup>ま</sup>ず<sup>も</sup>昨日<sup>隣</sup>裏<sup>の</sup>老<sup>女</sup>が<sup>然</sup>言<sup>ふ</sup>と<sup>且</sup>那<sup>の</sup>



世活めあるが能やア左根をまじぶ兼の貴人があつこの  
うら直の養子の養子で仕まふサその方が我程樂さう  
お是やア仕ね入つて兼くこい後へまを初て二年越ぬ  
ありませ便りもあつた人を酌ふし七月日がさされる  
のりう 二の年士をも初して居根とりふ 丸を  
あつたまもんヨりゆく便りがあひ極るるが兼音を他  
所へ預けて私さるや一生佳奉ふ出で仕まひまひの  
ト侯とまゝお民のかたがたの悔しくあつけりうまれ

とまゝしうまゝしう

此の民のまゝあつても世にふまふ婦女子の  
身の上落命あつ其の即の替りまゝのものを替の  
あつ根の勝らまは賤しめらまゝごらうの賤度を伴  
あつ言まゝしうまゝしう此らまゝしう親しく實の音の  
縁者があけまゝ血脈の人も他人の劣り右左り  
あつ実放さん茶まゝしう七艶をあつたばまを色を  
あつせそ利徳を取らんと奸謀て穴へ落し入る



強欲派道の者ふまのつらき身を苦しむ  
女の長息あるが世ふ多し平日常  
親類の力ありては只此の  
ありて不自由なき時へ他人の難儀も歎くも  
只余所なく同給て不便と云ふる人の稀  
多る男女ふらぎ世の中へ情をのりて人を  
其身の困下双の折までもを憐れむけり  
才一の慈悲善根と思ひまると他人をさし

強く慕ふの親父が輝かぬけまは其身に一生奉公  
取るといふ勝ひあるを考へて居やがるに  
此強八さぬの伯父とぞヨ殊に其方が父那が死ぬ時  
母もともお頼みやまこと涙を落して言ふこと  
成す此身が付て居る母もともお頼み  
存をせしむと請合ふ其方の親父の











言の取りまゝしとりの随分那うう情人のあつてまゝ  
まろの。うまおあやまるもどもを頼まよやう向つて  
真本どトヨ。あまややうまごう。トキ那娘が武士と  
店へ連れて行つての扱まるぶらう。あづる。あはるんせ  
一ナニま沢ハ七編の委しくおひとのふりごうから  
らへ遠く俯て見なせ直ふ沢ううりやとト  
たうぐ西東あのがまふく別とける

正史ハろは文庫卷之十八丁  
興傳

第三十二回

再説お民ハ其翌日極月中の五日の初寐覚も定  
香の風身ハあまぐと思ひ入浮世の外の里もぐる同ト  
世界ハまぶらまバ思を育るゆも常並の准ハハまど  
かふ捨あまむむむる人ハゆ流もまぐはぬ月日の  
り早く辺付く春のまあけえ入四辺辺あハ駿之ど  
け身ハけ児ハ正月の晴着もあせるるまを今ゆも  
張ハが降りる。明日のどく備成のあうとそまをとり



おらんりきだて思入どその合の半分せうへ入るこ  
さぞ入定りて非道を行ふては思入もなもつてい  
つて情なき目合合とらん情なきのうと相を  
痛ちうりていささま紫の娘も思入とす  
親との甲斐なき今の命をうらみ候の一寸糸  
添麻の顔みたくとくまば小児八目とまぬしと  
首と上 母板起板ヨク 氏へアレサも思入のうらま  
宍空とひ春小娘まうてお在所時母が起て火を

うらまの思入を温めをよるうらまの起るのたふしよ  
ドレ母が先へ起ませう 夫へウシは身も起しんぞ 夫へ  
寒ひもて人寐しとお在とのめ 夫へいもく合自長  
老女さんの行心餅をつくらう早く起て候ると候う  
言こののラ 夫へアヤやく早い候のつき板ごう 夫へ  
折でもたやく候をついてお呉ヨト言らまて母ハ相ツ  
クリ候と器より持らうふ節季の中の徳文の  
年を裁ゆも安うぬ母の心を思ひあはれ人並み



ゆりのもねあふると思ふゆらゆらと奈なめ貧しく活  
業とも爺のが在るもねあふ細くハゆるまると思  
ゆらゆるとと格の落しと金元へ立ておげの細く  
細くゆらゆら火うち箱ありがらるる日び住居  
身ハ老女さん所へ此のツトとね祝言は 氏ハアレサ  
ゆらのふノツト言ひつゝ麻呂着の其上にまき合  
まる 前後ゆらまき一糸の付細もゆら合せが悪け  
る

ゆらゆら行丈も 煙々不形着を唇ゆと直の表の  
方へ出るを母ハ悔とちめ 氏ハコレ井坊ヤ路が悪く  
氷が張つてまきゆら欠出し一糸成ナヨトゆらまき  
ゆらゆら路次口へ出て行くを脊後うげを見送りて  
肉の入りうが焚火まき消る思ひの物さ死の候を  
押へて馬ゆらゆらゆら車中ん路次の介め人なまき  
まきまきゆらゆらゆらまきゆらゆら欠出し氷を舞ゆら  
圓と心の屈度出て見るもまきまきゆらゆら新へ相も  
圓の



内々の愛ゆえ 内々へお民さんへく大なるおびやうを  
うら早く来るヨロシのころお合はれぬヨロシなれどお民の  
おびやうと藤子と明るお合ぐら又も欠くある藤子の  
まどぶさ 左へコウくお民さんおおの竹の為さんと今  
おとよ おおの竹の血の付と槍を一つおくらるを  
行てはまうこせ遊欠てゆて遊まうて連て来るせ  
おれ 身が行て連て来るにきり度が五六十人の黒  
装束が槍長刀の枝身石行のどろろ怖らて来る

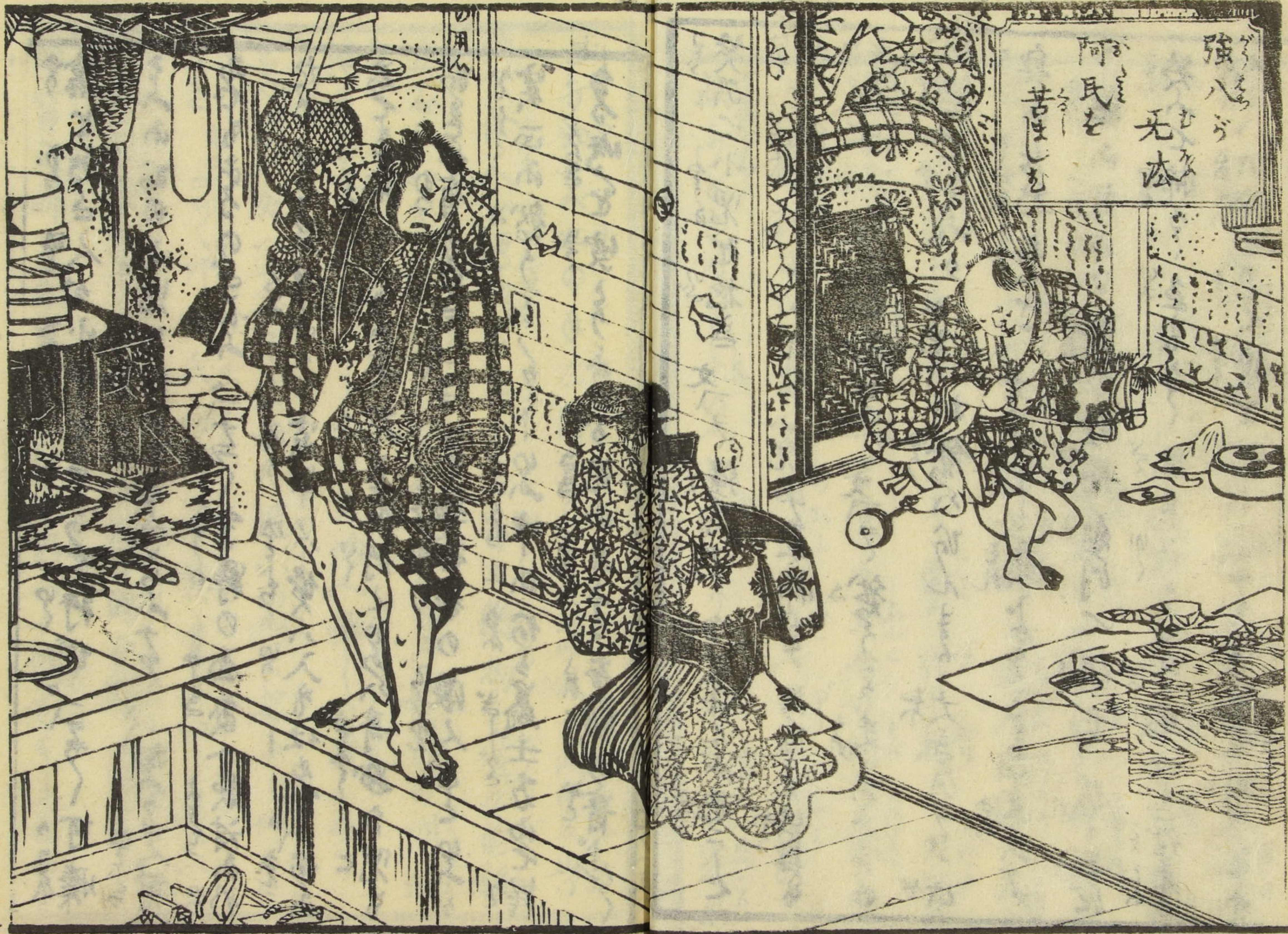
竹をねへト言ひてお民ハ胸をうらま周章平深にて  
路次板をうらまうらう欠出一身色バ使来群  
集の人々欠てゆたり帰るあり程々時の実二六  
何と定めてお民ねども遙か引行一群の人殺ハ  
それ 道の邊を遊立て南へさうくんと見るよりお民ハ  
狂気のどく下林脱捨て素直となり我子の泣せ  
義のゆりけ時塩谷の義士の面々お民の仇を  
討おへせ最ゆるさ其勢の今へけ世お民の仇を



こ  
のハのさう亡後も名を惜け途巾に追入の  
来り変りふ備を立ていふよよく歌と引かけ付  
死せんと四十余人と三院に分て押行く行列の  
後におきて大勢文武の達人風流の友の  
途中逢しゆ人が一後より走り折る欠如  
男の児歳八四才五才あるが文武の側へ欠如  
小兒伯父さん此身も同体なり此身も強ひら  
歌をさるヨウに只と詞より大勢文武完  
あはれ

笑ひて小兒を抱き文マ強ひた伯父さん小抱こしと  
行の怖ひのみ多ひ小兒ナニ怖るや  
光る両刀をおも居ら文マ然るま  
お鏡をさへり小兒お鏡のりんまり大まのうけ  
身も多持ねや文マア  
下巻の付る金の権冊巻のて渡され  
幾人怖るもさく抱き可笑け  
人へけ体と足と後を渡す一へてく血の





強八  
阿氏を  
苦しむ  
無法



陰とおと人が小児をさうつて行ぜ。一多く可憐  
とふおのの小児をたのまらざりて。一多く可憐  
あぢもまらぬのさうつ。一多く可憐の委へておの  
たのさうつのおのさうつ。一多く可憐の委へておの  
あぢも怖がらぬので抱きて行とのさうつ。一多く可憐  
あぢも有ものさうつ。一多く可憐の浪人ごさうつ。  
一多く可憐の然りて。一多く可憐の義士方ゆて異  
なるさうつをさうつするが先かさうつを鞍の音ドク

と歩出其二の三陣合家して一人一同一さうつ  
四十余人が所行の並んで各々得物を追ひて  
左右の心を死りしは中絶するさうつ。一多く可憐  
通るさうつと後にもさうつ。一多く可憐の  
こと斯る処へ大驚き文吾は彼小児を抱きしめて  
其まき。一多く可憐の氏何所から其まきのさうつ。  
一多く可憐の發明。一多く可憐のさうつ。一多く可憐の  
形は怖もせば同伴のさうつ。一多く可憐のさうつ。



叔小より何人ぞ抱て是まをまのこがは兒の親達か  
さぞ驚る天一脊後うら 暹うけあるもおれど今更  
大まの元々の山柱量注下イヤくもトウら共へん  
斤國も同じく勢ひ 斤へるむど老ハ孫うしひ太中おまへ  
さき子供でも我こそ思もせど貴公お抱きてある  
と八通と勇気のせまくと見え中は亡君の山在世  
おと六の剛へさうよの以一具ともなるのともなる成  
人の後に用ゆるまへまのものを山に居トのふ中かま

押を教せまうまへん一國は行列極めりも何と見  
集の中と大枝てまう道付く彼お氏 氏トもく何卒  
其思とお返り 我成てまへまうト 候まがく欠ありり  
氏へやサア母が来しヨ早くは方へお出ヨトのみを安  
てもまをまへん平氣にて 兼一ヨ母人さん坊ハ伯父さんと  
一國の行ンゴヨ 文ハアアアアア迷惑のみサアく母山と  
抱こし七同伴のめいト母の方へさうおー 文ハイヤ母山  
室あて案ぶトらまうこらふが悪氣を連れて来このむらぶ







その寶正を文編の塔の御抄の公付彼後編と行  
見まは

山坂さくら力も折る松乃雪 子葉

トあるとてありまはさそとと大のめ是とおもて我  
きしてを隠りけるいお民のりか編の委

正史 いろは文庫卷之十六了  
実傳

正史 いろは文庫卷之十七  
実傳

江戸 爲永春水著

第三十三回

爰におろしき物語りあり塩谷の家仲にて其名を  
高田軍ま務と只の小人役人を勤めしがあはる  
ある者はそのらて世のふ伶俐けは判官在世の  
其折のゆきと勤めさせても人の先を潜り抜く  
ゆきとひがうきま度雨ても小春味よく叙刺さゆり



とも用立者のきども其為とも実懐る主人の  
為と見せりけり自己が田へ利く変のともれども  
違く迹道をらへるまきよみおるををを  
いさうり他のおめを受むそのう権家小取入  
ゆも谷九をまがごとき者ゆへ彼が得つてをを  
其欲情より心お慥の大星がごとき忠臣ゆへ其を  
ゆりて取り入るまき多くは是れ欺きまて心をゆり  
者もゆりしはけまき助ハ思ふおれりま軍を清が

言葉多く難清うるをゆるゆあまのえ用ひざり  
ととる白者ゆへゆりしはけまきの大星ゆへ既に  
義と見せりけり自己が田へ利く変のともれども  
違く迹道をらへるまきよみおるををを  
いさうり他のおめを受むそのう権家小取入  
ゆも谷九をまがごとき者ゆへ彼が得つてをを  
其欲情より心お慥の大星がごとき忠臣ゆへ其を  
ゆりて取り入るまき多くは是れ欺きまて心をゆり  
者もゆりしはけまき助ハ思ふおれりま軍を清が



退散の頃また大患は頼し七層よりしが討入のまゝ  
追及小山等と信俱ふ不運を言ひ出し終ふ盟  
後とそひきしが義士等首尾よく敵を討七亡君の善  
虎府園覚寺へ引免る極みと軍を勝速くも  
出し七其道筋と考へ合せ箕田八幡の近行に待  
うけ義士の行列の来るを見つより軍一敗は及ゆ  
お身柄と候お原外でござりませうやしく天晴々  
お働きたり一個々小旗扱されども皆軍を勝た不致と

悪く難一人善なる者多く安らぬ様と七信とが其  
中に七折段多き勝が夫一我々四十七人の盟約と誓く  
志て七君の仇と報ひお今引免るごころえんが余人の  
旗扱ハ善なるぬト言ふと軍を勝お一久し軍一り  
さぬ四光の思し名し私どもも先達て速着小山  
等ふ惑ハさまと四連中と候とすし一と道と其候  
後と考へく見まはぬつきて四連中と候とすしと  
のを口播くぞんども今更改めおお加へ



軍兵衛かんべえが  
 浮薄途小うへくちみち  
 義士の引揚ぎしひきあげ  
 死祝しゆいを

矢兵衛



軍兵衛



下<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>び<sup>び</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>男<sup>おとこ</sup>入<sup>い</sup>村<sup>むら</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>其<sup>その</sup>田<sup>の</sup>八<sup>はち</sup>幡<sup>ばん</sup>へ<sup>へ</sup>日<sup>ひ</sup>  
奈<sup>な</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>何<sup>なに</sup>卒<sup>そつ</sup>各<sup>かく</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup>首<sup>くび</sup>尾<sup>び</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>本<sup>ほん</sup>望<sup>ぼう</sup>と<sup>と</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
中<sup>なか</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>せ<sup>せ</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>今<sup>いま</sup>日<sup>ひ</sup>只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>山<sup>やま</sup>行<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>  
お<sup>お</sup>目<sup>め</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>武<sup>ぶ</sup>運<sup>うん</sup>の<sup>の</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>所<sup>ところ</sup>に<sup>に</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>  
ど<sup>ど</sup>ん<sup>ど</sup>ど<sup>ど</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>是<sup>これ</sup>より<sup>より</sup>真<sup>まこと</sup>の<sup>の</sup>八<sup>はち</sup>幡<sup>ばん</sup>へ<sup>へ</sup>也<sup>や</sup>終<sup>しゆう</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>  
勝<sup>かち</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>  
早<sup>はや</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>  
仰<sup>おほし</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>  
仰<sup>おほし</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>言<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>

園<sup>えん</sup>覺<sup>かく</sup>寺<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>懸<sup>けん</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>門<sup>もん</sup>番<sup>ばん</sup>を<sup>を</sup>呼<sup>よ</sup>び<sup>び</sup>出<sup>だ</sup>し<sup>し</sup>我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>人<sup>ら</sup>言<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>回<sup>わ</sup>  
軍<sup>ぐん</sup>を<sup>を</sup>勝<sup>かち</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>もの<sup>もの</sup>なる<sup>なる</sup>が<sup>が</sup>今<sup>いま</sup>日<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>柄<sup>がら</sup>を<sup>を</sup>統<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>  
具<sup>ぐ</sup>お<sup>お</sup>勞<sup>らう</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>男<sup>おとこ</sup>の<sup>の</sup>酒<sup>さけ</sup>一<sup>ひと</sup>杯<sup>ぱい</sup>持<sup>も</sup>ち<sup>ち</sup>来<sup>き</sup>り<sup>り</sup>一<sup>ひと</sup>杯<sup>ぱい</sup>持<sup>も</sup>ち<sup>ち</sup>来<sup>き</sup>り<sup>り</sup>  
里<sup>さと</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>目<sup>め</sup>ふ<sup>ふ</sup>掛<sup>か</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>  
門<sup>もん</sup>番<sup>ばん</sup>が<sup>が</sup>は<sup>は</sup>由<sup>よし</sup>義<sup>ぎ</sup>士<sup>し</sup>等<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>侍<sup>さむらい</sup>も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>  
一<sup>ひと</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>面<sup>めん</sup>の<sup>の</sup>皮<sup>かわ</sup>の<sup>の</sup>厚<sup>あつ</sup>い<sup>い</sup>男<sup>おとこ</sup>が<sup>が</sup>先<sup>ま</sup>刻<sup>き</sup>ハ<sup>ハ</sup>途<sup>ちよ</sup>中<sup>ちゆう</sup>を<sup>を</sup>瞬<sup>たひら</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
後<sup>あと</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>す<sup>す</sup>門<sup>もん</sup>に<sup>に</sup>極<sup>こく</sup>ま<sup>ま</sup>へ<sup>へ</sup>居<sup>ゐ</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>け<sup>け</sup>け<sup>け</sup>へ<sup>へ</sup>来<sup>き</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>  
幸<sup>さい</sup>ひ<sup>ひ</sup>不<sup>ふ</sup>義<sup>ぎ</sup>の<sup>の</sup>奴<sup>やつ</sup>等<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>見<sup>み</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>端<sup>はた</sup>敷<sup>しき</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>



まの、ハる極是ハ社の懸ミ切リて入刀の標レゆ家  
踏敷キ一ト六四ハつまりを我クグト立上るを仲良キ  
助ク押とモ申一是ハあさり各方那キなる人非人ハ對  
面まるも目の標レ酒も入拜とのとよて迷ミ遊ハ帰  
きん一と言ひのり更に取合ハね六波軍キ勝も注  
方々くまごころとて立まけける

一後ハ義士等音川家ハ此領けの御りお被美奉るが  
物持ハ折内ハ其り聞とあるを全修ハ此記せし

第三十四回

昔の人の言るるの如く命ハ天ハあつたを只其人ハ在  
よ是故ハゆせは小還るものも世ハ憐ハ入まハ庸医のたふ  
瘵人の救替のなき命とあやまらうまろ編ハ余のあまり豊  
おそれざらんや吾學文士自らト故人の法術の論もあまり只  
権威の勢ハ小余トモ樂品の能毒ハ身をも身上の配劑をりこ  
志ぞ病人を治すまろこれとあはる茶飲りて全枝るゆもあま  
あれ竹束の鉄炮玉横その方のまろれあまり思らども柄をるを



いりちを過ぎのき各といふ古人理を真て其法をまみ味十  
果の酒合のあつゝ薬種の切らるるを互ふ持合七序病小酌中  
まじりの加減ありあつるを我傳不瘡ふわてふ此一味ハ除下瘡が  
痛くかふべしと主調合を入智と己が受合の上つを薬小を  
用らる其功能の持まふ似う醫六六根も者ぞ喰の時ハ  
その味甘くあつて七生で喰へばその味辛く薬種も是小異つを  
とやくてん 七集とあつた稀もつとを怒る人一集を以て病を  
りやまら集送といと多うん権威と旨と七長棒小主廻り薬

早の給金も余為代で差引勘定身袋で病人の汚れを  
除く不礼とまぬぬおせ庸医ふるも痛され欺りれる流小の  
救医者か猫と盗んど極ごとのふ茶宮さ人持されさるの懐へ  
押込てはをまらるふ欠歩の貧医ふるも良医も中ん合ふ  
惜く初の人をりふて茶を苦ふふあまざされども是と一降ふ  
枚ま定規をのりふ可う爰小鎌倉本庄の令次町小大医  
あり長八僕の初と物並の中を隔て長家門去園へ破屋  
道へ又妙後形の腰張もいづつと輝五流のうり 主利調合







考一此方へかき入るまじい治療して進せぬが愛のこ  
りそのか方のちり年入て進のりこまると考一医者と鞍部  
つらて見ぬが甘味があまねと逢上一及乱公麻症の實のゆ  
ゆので此方より望んで療治して山深惑でも直して進せぬ  
潮来常の文句に駿者の善札と深山の橋取名ゆりは  
さて次第をぞこのか人武天皇の時代當時一貼りかど  
一ト圓う何後と極て並並流ゆりゆひませねと代りか  
中へ引張りのゆりゆり病入ふよのそ茶種もき價持も貴

ねぶるぬの茶代くくと極て並ねぶのこ一中人のそは病  
家まじい人調合を仕まひ昼くら出ても毎日飲更で障な  
とねい後へ拙者のゆりゆり病入ふよのそ茶種もき價持も貴  
まの茶をみるゆりゆり病入ふよのそ茶種もき價持も貴  
金さきよゆりゆり病入ふよのそ茶種もき價持も貴  
とやら口癖でまじいゆりゆり病入ふよのそ茶種もき價持も貴  
ゆりゆり病入ふよのそ茶種もき價持も貴  
療治ふゆりゆり病入ふよのそ茶種もき價持も貴



の虫とやまは酒落でござるもはるる... 珠へ九の麻相へはける也  
ござる一圓り茶代金入両でござるがぶでござるも... 珠へ此れ...  
てま何れうござるもはる 珠へさぶつ両... 珠へ此れ...  
お安うござるもはるおの方う七両きかへはるるをねるる  
明日為人を同及どうもまてはる海の家代金入両きかへ  
せうと直後せらめて陸庵の接役へ彼町へはるるの...  
然れはるるもはる病家ごの... 埋草がまのハテ翌日へはるの金入両きかへるる

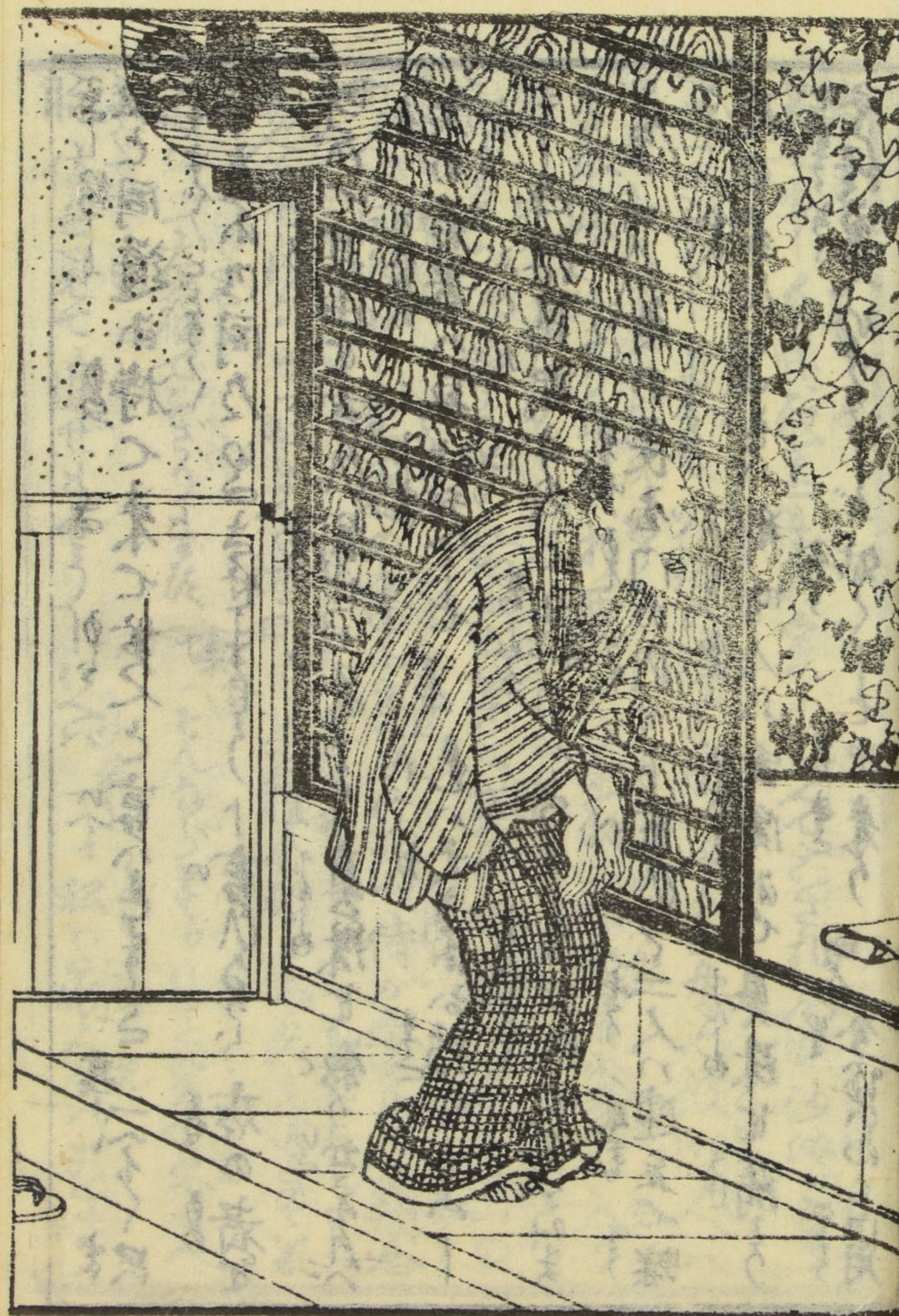
さけまばよのトありうる茶のるの九ツの跡并き...  
此海國野の堪庵とりのる元來掃灸赤徳の...  
谷家の言役小野九太夫が中り壮年より身持放り  
あそ君の勤るもさるう咽を遣れ録金入るる医者...  
茶安留地面の賣買算巻子嫁入の妹人七世を渡  
且ごも表の医者のるるれが古主判官の敵師直あり入  
さるるもはるる師直が権威あて出入るる多し此令候  
町の家化して威勢さるる身とまうはるる尾るるの



唐本と後を継ぎて其の傳ひの奇物を多くとるべしと云ふ方匠と  
の家の相のりと思ひ仲景と扇の異名時珍といふ人  
士の兩の四ツ目等といふ歌を詠一人とあり本草綱目と加  
古川本等の旨同の人うと思ふと七と持し秘有するは茶  
の苦芳もさし罪へふ却同あるんが只世の字を望みし七  
口先をうりて病人と騙し込むことを危ふけ且却て  
青山の町人の煉庵が貪慾なるを縁て茶の  
うゑりや聖と病人と連て来ると驚く茶と

のこしと  
吞込ませ其次の目本町の一番大まの茶種  
屋へ送き煉庵の機子紙をさうかへりて町人其  
子紙のふが意み入用とらぬと同道に見世の  
お人持し七勝越しとお巽ませと云ひきて茶  
種屋の亭主はその子紙を漬下し亭主と真  
珠が出入用と見へまはな極高派とてとまは  
らるる有合せは及所を種く取交まうては見  
入ませり町人へ危も角も考ふ欲いと云ふりて







私と同道の持て来て美人と言ひまじき事  
今直に同道なりと言はせしむる言ひまじき  
呼びて其由と言ひ聞せし土着より真珠を  
店の若者の身仕度して是れは大きにお徳せり  
まうと浮良世さぬと狂信のふりなり金沢町  
庵の窓にりし言は那町人の去閑めて真珠を  
を俵袋へりし言は姑くして出来り町人今  
今直に同道なりと言はせしむる言ひまじき  
呼びて其由と言ひ聞せし土着より真珠を  
店の若者の身仕度して是れは大きにお徳せり  
まうと浮良世さぬと狂信のふりなり金沢町  
庵の窓にりし言は那町人の去閑めて真珠を  
を俵袋へりし言は姑くして出来り町人今

其心ゆくも間敷直に美人の心とぞされ今  
予一ツとくト負ふ可火鉢の傍にけりけり  
自水場へ入るは目のお悪く茶取病人とも  
智るまじき味庵の茶出茶を美の女有て  
町人が同たせし若者の番ふありけり侍が  
場へ通しけり味庵へ本町の茶種をひくと  
訖り一入を根でござりし味庵へ  
脈体を見せ進むまじきトしけり



おまの今より上より真珠の代金  
いざな皮とせしむる様をうらうらとせしむる様  
そよひの美しきとせしむる病を治す先も角も美し  
よろいふとせしむる病を治す先も角も美し  
おまの今より上より真珠の代金  
いざな皮とせしむる様をうらうらとせしむる様  
そよひの美しきとせしむる病を治す先も角も美し  
よろいふとせしむる病を治す先も角も美し  
おまの今より上より真珠の代金  
いざな皮とせしむる様をうらうらとせしむる様  
そよひの美しきとせしむる病を治す先も角も美し  
よろいふとせしむる病を治す先も角も美し

珠の代金  
私に遠方でもせしむる真珠の代を  
おまの今より上より真珠の代金  
いざな皮とせしむる様をうらうらとせしむる様  
そよひの美しきとせしむる病を治す先も角も美し  
よろいふとせしむる病を治す先も角も美し  
おまの今より上より真珠の代金  
いざな皮とせしむる様をうらうらとせしむる様  
そよひの美しきとせしむる病を治す先も角も美し  
よろいふとせしむる病を治す先も角も美し







ごうて へんま ちん  
此勝まのかはへん 跡のまうまう 直真珠のう 今まうまう 早く  
ひま ちん ちん  
直真珠のう ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
見母まの 四文通がまうまう 下 懐より 珠庵のま 紙まう  
か ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
相違のまうま ちん 直真珠の ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
別な 伊勢 直真珠と 紀州の 四覧の 入まう 其 直真珠と 変へん  
まうま 四覧のまうま ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

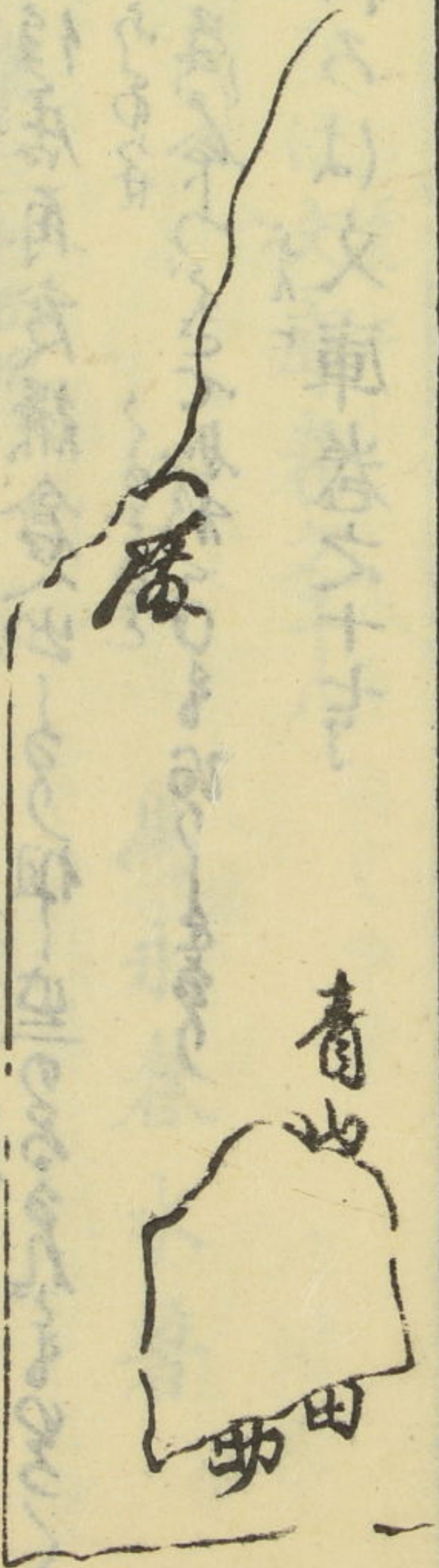
てん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
珠庵も 年い 信じ ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
合点の ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
吉の ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
彼 青山の 町人 ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
ひん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
変詐 取て ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
ねん 茶種 屋の ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん







から 聖の心をあきらめ ちやうとせられ 甚だしく  
 種けよき方 公配く 彼葉つて成り 先達の中  
 手免えあり  
 風波有るに 庵とよみ者 野九  
 太主貴九十節の古主を因縁を不願敵地  
 内通く者いりる通力を天 して養ふと考之  
 ども 業種を久しき 養育 貞徳をく 鎌奪  
 せよ 返業 相用は 係 盗 水 汚れ ぬ  
 る 是 乃 損 本 時 臨 之 乃 法 助 力 達  
 遣し下り



傳台右の史跡をたしむるに元助もあまを現之或は  
 憐れ 然らんと 傳と 傳と 傳と 傳と 傳と 傳と  
 別館なる稲花の神のこれくが真意と勝とのふ神意のあり  
 後金快して史の傳末を主君の後室瑞泉院の若くは七の



神徳を尊ぶるものけるを後義士の面々本望と遂く六指針  
 慮の驗を閑さるべと云二位元助福を大明神と今小波地  
 某と云ふ家小今小傳てありと云ん  
 亦曰け片是元謙倉の室所ありしが凶暴の後元  
 住居再度鎌倉へ出より但此のるるもの  
 其は文庫卷之十七

正史 いろは文庫卷之十八  
 身傳

江戸 為永春水著

第三十五回

今此章にありせし諸書の中より実り多きと思ふ  
 自筆の類はとらりしやこれバ娘也方ぬらぬ  
 ありなきことと九ひりの物語の世の体と推  
 量し七と面白くと思ふ條下ハありぬべし但し  
 なるなバ公々く讀み入るとありしん其共書ふ人







老翁申ん  
心なき  
かろ  
ま

花の  
とと  
二月  
古







大星の辭世

水ふらゆる花を藤らぎふ深久に

白ひむらりて庭の梅が枝

今ふたやここの葉ももみりけり

おのちのちとて霧ひびくらん

圖書ふ一説らり義堂の先少は書ふらり

心よりぬるる事と亦主君なる人の臣下の情さく

非道なるる家國を亡し子孫の絶るる和漢にその

例も少くも塩谷家の滅亡も海を慈念の存る

ありこのあまの太丈夫魂の人のあざけり

たまたま失の眼さんど情さき礼を違るる

とて出ありせせまづこのゆめらうと主君の威光と下

まざる人の情ひの募るる居下と恥しむる情さく

さるる頼て身も家國も亡びたるものご用ひあり

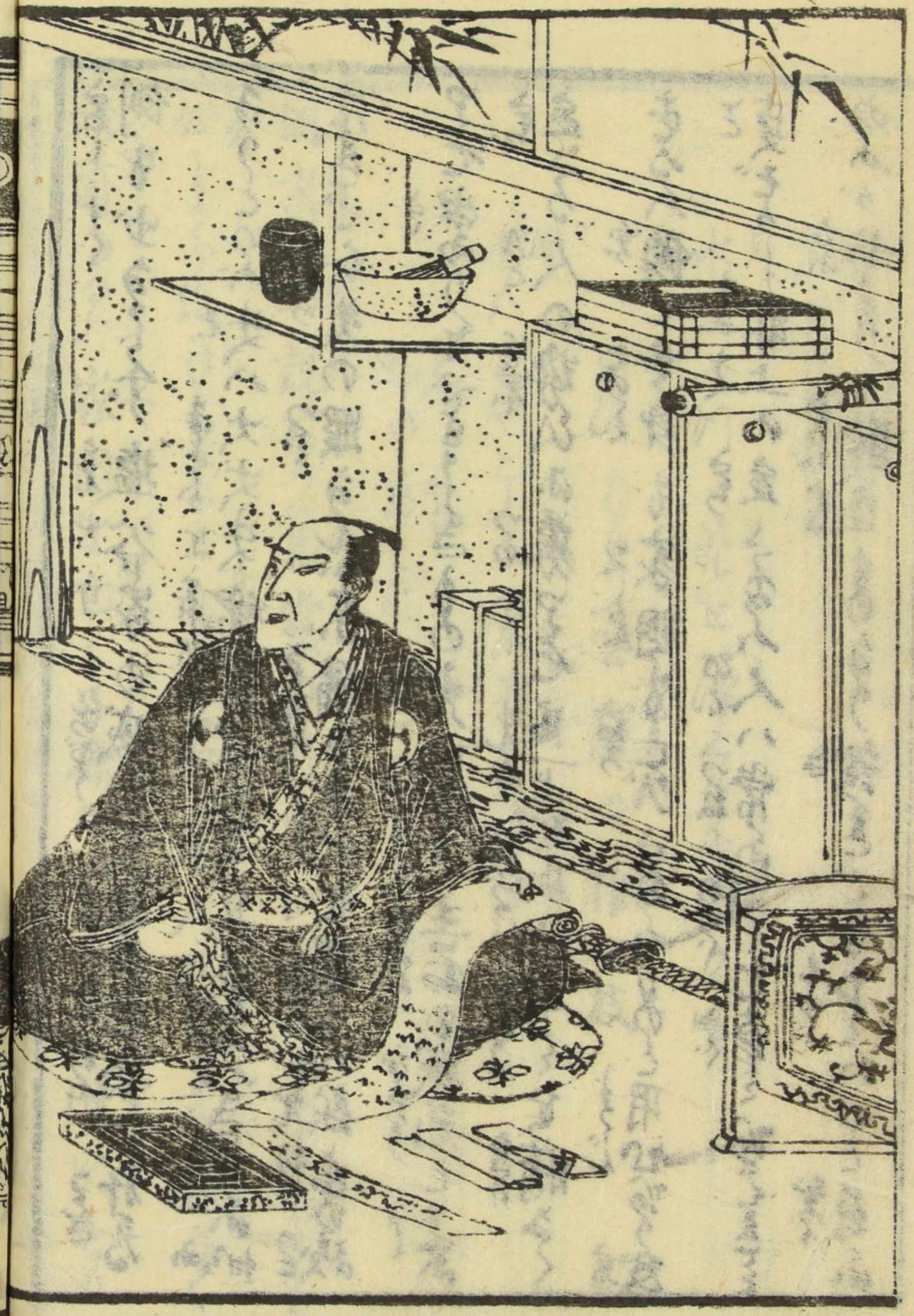
まどろり亦上のまどろる人の常ありて

ぬめがゆるり難ありのなり





大星討入以  
前所々へ贈  
遺書或ひの  
世ふご認む





聖のくまのめを不使するものどもまうと思ひし  
ねが後まうのりのもまうえーまを泰分とりし  
あるのめく癖として君を焼く報に最悲に不意の眼  
利勢の果る華多けま仁公ある君もお相と受  
取入て忽地まると止めて刑罰を烈くせうく  
まり傳の塩谷判官の居下と嫌々民をたおまを  
あつとま真より三代以来の君の時み急の怒り  
あ七清直の家臣を非道に刑罰の行ひし  
と

賣りのけり  
ある密居ありて金奉行を勤めありけるが或時合流の  
盗賊入りて千両箱一ツ失うりし程の給  
るまども一向の初まは是の依て金奉行の不意より  
發りしと  
けは彼者の返書に拙者が領りし役まらま別  
我等が盗人なりとやけまその通りを務正めや  
よま大の怒り取ひ以の外の返書不届に後より



室も一彼が盗も一覺へがあらゆふ小左衛門の大藤を  
 中とらふも意及刑法の行へとて遂にそ彼人を盗  
 人小室もしらせり然れどもそ人に些もあたらふ  
 而て只盗まもてを越度とて親をそん城の候  
 可を恥て盗人小室をきりて是を不法の  
 極め候とせらるは捕候とて盗賊の當人と候を  
 らるる士道の恥辱豈に惜と思ふをそ志の當と  
 さまをあらえまや儲も城下の馬場へ彼人を引出し

柳の大木小枝り付て西をきりて家中の令町へ  
 百姓小見を盗人よ盗賊よと大勢の言り傍に  
 恥を与へて後一日の指と一本づつ切捨させ  
 仕目のろふ切落させり如何にまふ申とて  
 盗賊の大罪人と思らぬ者もな一呼叫士の高命と  
 のふも悔りあらゆるる茶世の宿業ゆて災難の悪  
 名を流し日毎の苦痛をせりりぞ是も連流の  
 妻子親族の悲しき恥しきと悔しき一壁の物も



へー此時の如く被士ハ血むる眼をいさしと齒に  
喰ひあがり我後美ゆ付ての藤原と咎もあぶる  
さけきと泣血賊と定むらして刑得ゆ行りゆく  
あり金と泣血と者ハあめりて一頓て我明白なるを  
知らせんぞ武士の悪名を究むるを志す骨随ふ人  
あつての如く見よ我ハうらぶ皆富家の悪人と  
あり塩谷の家名を絶さばあはれなき思ひあはるる  
男の志と誓ひ狂ひて息絶けるを見る人ハ身の毛を  
あはれ

あつての如く怖甚ぬものありしが夫より後雨の歌の  
陰々たる折々青くする色の火の燃ゆる馬場の赤  
西を花やどり昔げの後立しと思つて夢にせ。ま  
渡さぬるまごさびぬら故に終果るぞ見よや見よや  
あつて思入バあがまらるる夢みせうらくと美人怖し  
心付むしと通りゆくさる者途をゆく怖と振りゆく見  
まはるまの精光より血を流し鬼火の光り物ま  
怖ろしげなる顔のありくと辺付ハ心体と笑ひ著る



素よりしとぞ吏より 羨望ある人の不便の思ひは 御  
其の法をを修行せしが 主殿のや 慈雲の法は 御  
止むけが 其士の 善美の 罪の行は せしより 二十二年 因ふ  
あつて 月日の 塩谷 家ハ 滅亡の 乃の ひとし  
こ 遠ハ 花岳寺の 方丈の 周界の のが せし  
あつて 蟻陣 尿の 脱より せし 武士の 御  
慈雲ハ 然も ありけり せし せし せし せし せし せし  
るありけり

この花岳寺の方丈の周界のものがせし  
あつて蟻陣尿の脱よりせし武士の御  
慈雲ハ然もありけりせしせしせしせし  
るありけり

第三十六回

今爰小説く物修りハ 判官在在の ありけり 本國  
より 鎌倉 在 番の 諸士の 多うる 中ハ 慈胡平太と  
いふの あり 折しも 弥生の上旬と 四方の 榎も 時  
顔の やとろが 初て 春風の 身ハ せし くと 来る 頃ハ 人の  
心も 自ら 浮き 中ハ 小こまき せし せし せし せし せし せし  
世の 觀音 開帳と 群衆の 多清 胡平太ハ 國元  
より 邊き 頃 来り 者ハ 鎌倉の 繁華 花 御



けさ六勤仕の隙を見合せて單履丸一個を召  
連を先規音の糸滴せんと途中まで出うりか  
ふと同級へのふしき大切の用を思ひかつけられ  
矢立を取つて一真紙の委細を認め供の男を  
嘆ひ道づけ七 胡コレをさへハ大變多ういひ紙と拵を  
一ト走りおそまへへ取り大驚氏へ怪し居て居りやれ  
い出がけの差あひを行要のりせ失志のこし一  
へ左振るるべしお紙と大驚きぬハ一上りなれハ

八十八

名を返りて 胡一やく返りて因くゆのぢやなぬ  
きくもて有るふとて 供へへく使て大貴公さぬハハ  
茶店ふてもお入るは 胡一上りまうくと使つて見  
中へ先達へ晴野氏へ同道を来りこも大さ道も  
覺へて居るゆゑ徐ろ歩行て居るうちゆゑさうが  
進付て来るを返らう若変ともみ途で逢ハさバ  
親音堂心符合さうト言ふを岡捨人へ先來一  
方へとまう行く是より 胡平太ハ只一個懸札の



去地これの別わかぎるゆゑ群集ぐんしゆの人と左処へ除け右処へ  
除けり行ゆくうちも縁ゆかり七道しちだうゆる場ば所ところゆゑに懐なご  
中物ちゆうぶつの丸まるを村むらよト朋とも輩ばいどもうおし下くだまき只ただ五  
腰こしと懐なご中ちゆうの公こうを村むらけ種しゆくむふあふぬ道みちもあ  
とくく長谷ちやうその地内ちのちにゆりゆりおしも年頃ねころ四十  
なうりゆそ本郷ほんきやう廣神ひろかみゆみか月代つきしろ一癖ひとくせあるま  
大男おほおとこ酒さけの樽しやく探たづねが道幅みちのちも狭せまくと歩あむちちうり  
まそれと見るみるより片板かたいたへ除よけんと為なるし胡平こへい太たを回  
まらば八千一

多おほぶいおほの悔くみきと先まより行ゆ為なり大男ハヤ  
二本坊ふたほんばう久ひさけ度どの大道おほみちを明あ高たか首くびとアゆる久ひさと  
は身みの實じつ為なるやアづるト喧けん花はな買かひふふぬ存ぞんけ  
胡平こへい太たも念ねん然ぜんとせしぐまより温ぬる和わの十じゆ海うみゆ人  
胡平こへい太たも念ねん然ぜんとせしぐまより温ぬる和わの十じゆ海うみゆ人  
行ゆ為なりて久ひさけ身みの森相もりあひ丸まるの薄うすゆりと行ゆしと吳  
つるまは大男ハナ森相もりあひと面おも向むか人ひと盜賊たうさくと為なるしも  
森相もりあひとまへ言いやゆりが縁ゆかりびりい今いま實じつ為なるしとま









歌川  
強八喧嘩  
買ひ暗小  
奇縁茂  
結むすむむすむ

奉



くけい小差を大小も羽織も袴も千所へ後盗  
城の正体とあらんと平野源一と許しとせらる  
新う言ハまるのが情を切とも突とも務め  
考ろ強八さぬの申を新に故号が刀がまのめう  
言ひり、毛尻を引まらり胡平太が目の赤へさ  
つけらるる堪忍も寛う是まをと刀の銚元ら  
げて既ぬ抜んと甘しおしも物見さるる群集の令  
相色ハ武士今一個ハ名ふ國人なる悪者ゆゑら

おまする人如おまらんと情のふ行と極りつ、後ひび  
さるたうりにて止むんとさる者もさ其人之の後ろ  
より「ア」マア極りてト言ひらるる縁の人と推分  
こみ現るるさるる一個の處女胡平太の身のなり  
さるり娘「お後のさる、四乃程でござるまらぐさ  
お花をのうらまららら率四了芳るまららト言ひ  
強八さるる人さ 強「これ 強  
変じやる入らるる世活ごき所放せ 民「ア」マア







民ハトモ少お茶も強情ご子エト言のうがら  
婆ふさーらるはらざーの誓を抜て 民ハお茶も  
驚う言の出ーちやアお帰りでもあつたといが  
元ハと言バおの店へ去公お在のが出来とい  
くの後立で初うりみるふらこのごうを元  
と中ををのけさごも今安ぬお持合ごの  
うもせごふとも宜かうぬと速くお処へ往て  
お是ト言らして強ハつくと思つて見まは

出入言の券つて見さ処がぬんまう物も成さうも  
さく品ハ仍て抜うぬね郡武士が願うぬぬ  
金流ぬ印けごも公ハ五分の恐怖をのけは  
民が言葉と幸のぬ真の退ちふとちりぬ一本の  
箱もぬぬぬハ損とぬぬ受りぬぬぬと目方せ  
引て見まがら強ハさうたうぬぬ代物ごが  
ぬぬがぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬを命真加ぬ盗賊ぬトへらぬぬを利ぬら



のどま のどま 身 み を 勝 か り 抜 ぬ け たる た ら ぬ ぬ 教 か を 隠 かく して け け る  
 人 ひと の 中 ちゆう を 勝 か り 抜 ぬ け たる た ら ぬ ぬ 教 か を 隠 かく して け け る  
 お 氏 うぢ の 孫 まご を 見 み る ら ぬ ぬ 胡 こ 平 へい 太 た の 前 まへ 小 こ  
 腰 こし と ぬ ぬ 氏 うぢ の 孫 まご を 見 み る ら ぬ ぬ 胡 こ 平 へい 太 た の 前 まへ 小 こ  
 下 した さい さい 下 した さい さい 下 した さい さい 下 した さい さい 下 した さい さい  
 申 まを 人 ひと の 孫 まご を 見 み る ら ぬ ぬ 胡 こ 平 へい 太 た の 前 まへ 小 こ  
 身 み の 前 まへ 小 こ 平 へい 太 た の 前 まへ 小 こ  
 後 のち さい さい 下 した さい さい 下 した さい さい 下 した さい さい 下 した さい さい



